

## 身近な地域から日本に住む外国人について考える

群馬県立太田高等学校（定時制課程） 長谷川 修

### 1. はじめに

街を歩けば外国人とすれ違う。そんなことが本校のある群馬県太田市ではあたりまえの風景となっている（図1）。生徒も日常外国人と接する機会を持っているし、何より私が勤務する定時制課程では、多くの外国人子女が学んできた。ここ5年間だけでも、ブラジル・ペルー・パラグアイの国籍を持つ南米系の生徒、ミャンマー・インド・ベトナムの国籍を持つアジア系の生徒が多数在籍し、校内には様々な言語が飛び交っている。まさに、生徒にとって外国人は身近な存在である。

さて、「私の勤務する地域ではそれほど外国人がいるとは思えないが」と疑問に思う先生方もいるだろう。その場合は、身近な地域を市町村から都道府県のスケールまで広げて考えていただきたい。都道府県レベルの統計では思いがけずたくさんの外国人登録者がいる。高校の地理では都道府県も身近な地域として取り扱うことができることから、本校ほどではないにしろ、日本中どの学校でも「日本に住む外国人」は身近な地域から捉えることができる主題となり得るだろう。

### 2. 身近な地域の調査と結びつける

ここでは、教科書\* p.36～37「外国人が増えてきたのはなぜだろう？」を主題として取り扱う。その流れの中で教科書p.50～60「身近な地域で国際化の進展をとらえよう」にある地域調査を組み合わせることが効果的である。しかし、本校定時制のように時間的な制約により身近な地域の調査が難しい学校は多いことだろう。そこで、今回は指導者が統計資料を準備してみた。様々な施設からの資料の入手手順を説明することで、生徒も擬似的にはあるが調査の一端を垣間見ることができる。もちろん、十分とは言えないが、実践後の生徒の感想には、「他にも市役所や統計局に行って調べてみたいことがある」との記述も見受けられた。

### 3. 授業の流れ（おもな問い）

- ①1981年と2001年を比較して、日本を訪れた人々の増加した国、減少した国はどこだろう（教科書p.36の主題図①・②の比較）
- ②日本に住む外国人の出身国はどの国が多いだろう（教科書p.37の主題図③）
- ③太田市に住む外国人はどのくらいいるのだろう（プリント：太田市の統計資料）
- ④太田市に住む外国人の出身国はどのような国だろう（プリント：太田市の統計資料）
- ⑤日本と太田市では居住する外国人の出身国の特徴に違いがある。なぜ、そのような違いが

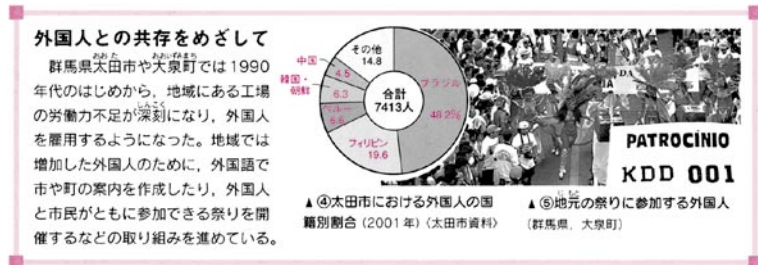


図1 帝国書院版「高校生の地理A 最新版」p.37

\*帝国書院版「高校生の地理A 最新版」

あるのだろうか

#### 4. スキルコーナーを利用する

学習指導要領（地理A）に「地図の読図・描図や地域調査などの作業的、体験的な学習の一層の充実」とあるが、教科書にあるスキルコーナーはとても便利である（図2）。ここでも、授業の流れの第③段階でスキルコーナーを活用し、グラフの作成を指導した。

生徒の作業のスピードには大きな差異があるため、作成させるグラフはレベル別に3種類用意しておき、生徒に選択させた（ここでは「太田市の過去10年間の外国人登録者数」をテーマにA：総計の推移、B：総計および男女別の推移、C：ベスト5の国の総計および男女別の推移、以上3つを選択させた）。

生徒が作成したA～Cのグラフはそれぞれプリントに掲載し教材にすると、いろいろな発言が飛び出してくるので面白い。

**スキルコーナー**

**効果的なグラフの作り方②**

長年にわたる連続したデータを図化するとき、最も有効なグラフに、折れ線グラフがある。折れ線グラフは、ある年からある年までの変化を表し、棒グラフも何本か並べていくことで、変化をとらえることができる。棒グラフは折れ線グラフのように、細かく連続した変化はみられないが、絶対値をとらえやすく、変化をより鮮明にみせる効果がある。

▲◎折れ線グラフでデータを処理すると……

▲◎棒グラフで立体的な表現をしたら……

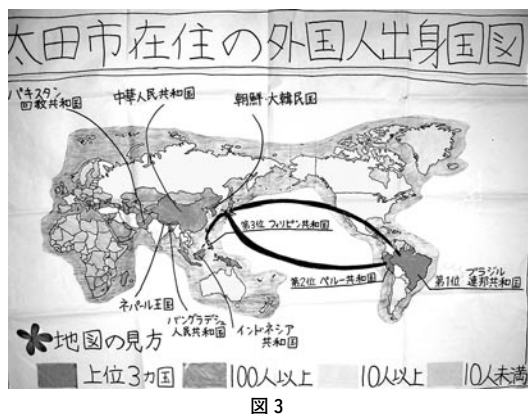
図2 帝国書院版「高校生の地理A 最新版」p.37

#### 5. 主題図の作成

授業の流れの第④段階の場面で「太田市に住んでいる外国人の出身国の統計を活用して、その様子や特徴を世界地図上にわかりやすく表現してみよう」と、生徒に投げかけてみた。

図3は同じ問いで昨年度の生徒が作成した主題図である。トレーシングペーパーを利用し特大の

模造紙サイズで作った力作である。流線を用いて表現するなど工夫がなされているが、細かく見ると間違いも多い（たとえば、凡例の設定、アイスランドの扱いなど）。今年はこの主題図を導入の教材として活用してみた。生徒は先輩の作品のレベルの高さに驚きながらも、しだいに改善点を指摘し、自分たちの主題図作成のヒントを得たようだ。



#### 6. おわりに

今回の実践では、教科書を利用した発問から、生徒や地域の実態に合った発問へと内容を構成した。ただ、授業計画に柔軟性を欠いたためか、外国籍の生徒の発言を十分に生かした授業にはならなかった。その点は、今後の課題としたい。

地理Aはおもに主題的な方法に立脚した学習が組み立てやすいよう配慮されている。とくに、「高校生の地理A」は文章による表現が少ない分、地域や生徒の実態に合った様々な主題を設定できる。この教科書の特色を生かして、今後も生徒にとってより面白い主題を見つけていきたいと考えている。